

## こつしもホタル祭り

内藤 真理子

郵便受けに【久我山ホタル祭り】のチラシが入っていた。ポスターにでもなりそうな厚い紙に“ホタル”より“星垂る”の字が似合いそうな、星屑と蛍がまたたく川沿いの写真をバックに、開催日やイベントの会場などが謳ってある。二年続いたコロナ自粛が明けて、随分力が入っている。

当日は、蛍のお祭りなのに、昼間っから沢山の人出である。そういえばチラシには、普段は閑散としている川沿いの公園や、稲荷神社、その他でも模擬店が出ていたり、面白そうな催しがあると書いてあった。

私は、昨年と同様、家人を誘ったのに乗ってもらえず、暇に任せて『世界大百科事典』を広げ、蛍は何の目的で光るのだろうか、引いてみた。

暗闇の中での警戒（ライト代わり）ではないらしい。蛙は蛍を捕まえて食べることがある為、目立つのはまずいのではないか。

雌だけが光る蛍がいるが、その雌には翅が無い。このような蛍の雌は、光りながら尻をあげて雄をおびき寄せる。

雌雄とも翅があり普通に光る蛍でも、雌は体が大きくてあまり飛ばない。水辺の草などに止まり、飛んでいる雄を光の信号で引き寄せる。信号はそれぞれの種類によって、色や光り方、又一定時間に光る回数などで区別がつく。

ゲンジボタルは、常温で一分間に七十〜八十回、ヘイケボタルの光る回数はもつと多く、一分間に百二十回とある。

夕食を済ませ、川べりの会場に行ったのだが、行くまでの道は人でいっぱい。お巡りさんやアルバイトの女子学生が何人も出ていて交通整理をしている。普段なら五分で行かれる川沿いの道に行くのに三十分もかかった。

コロナの自粛が解禁になってから、テレビでよく見る有名観光地並みに、道いっぱいの人や、子供連れで、恋人同士で、友達同士で、ガヤガヤ、ぺちやくちや、キヤツキヤと浮かれながらゆっくりと少しずつ移動している。

とても付き合い切れなく！

私は一人の身軽さで、川から離れた道の端っこを這う這うの体で逃げ帰った。「ホタルを見たかって？ 近寄れなかった！」